

生涯教育研修活動報告書

一般検査研究班

- 1 実施日時： 2023 年 2 月 21 日 19 時 00 分 ～ 20 時 00 分
- 2 会 場： WEB 開催 教科・点数： 専門 — 20 点
- 3 主 題： 実症例から学ぶ。一般検査室のアプローチ方法。
- 4 講 師： 小針 奈穂美（埼玉医科大学病院）
柿沼 智史（川口市立医療センター）
中川 禎己（小川赤十字病院）
- 5 協 賛： なし
- 6 参加人数： 会員 185 名 賛助会員 0 名 非会員 0 名
- 7 出席した研究班班員：藤村和夫 室谷明子 柿沼智史 渡邊祐樹 小針奈穂美
中川禎己 松本実華 織田喜子
- 8 研修内容の概要・感想など

今回の Web による研修会は、3名の講師による毎年恒例となっている症例検討会であった。

症例1では、小針氏より、短期間で急激な炎症像を呈した脳室炎についての症例報告があった。脳室炎は、病原となる細菌やウイルスが、脳実質に突発的または多臓器での感染巣からの侵入などにより、発熱や嘔吐、意識障害などの重篤な症状を引き起こすことで知られている。また、病原がウイルス性と細菌性では、治療が大きく異なるため、それらを鑑別するための髄液細胞数は、緊急性が高く、患者の予後を左右する重要な検査である。そのため、髄液細胞数は、正確且つスピーディーな報告が求められ、正しい知識と手技が必要となる。現在では、肺炎球菌ワクチンやヒブワクチンの普及により、細菌性髄膜炎が激減したため、症例のように、細胞数が数十万となるような髄液検体が提出されることはほとんどなくなった。しかし、髄液細胞数の迅速で正確な結果報告の重要性を改めて再認識できた症例であった。

症例2では、柿沼氏による、尿沈査中にクリプトコッカスが認められた症例について報告された。尿中に出現する酵母様真菌のほとんどは、免疫力低下などで発症することが知られ

ているカンジダである。クリプトコッカスは、鳩の糞中に多く存在し、真菌性髄膜炎を発症することで知られ、墨汁染色により厚い莢膜の有無を観察することが確定診断となる。症例の尿沈査は、出現した酵母様真菌をよく観察することで莢膜を確認できたとのことであったが、鑑別には、鏡検時の工夫や熟練を要するものと考えられた。しかし、尿沈査中のクリプトコッカスの出現は、真菌性髄膜炎の早期診断に繋がる有用な臨床情報となり得る可能性が期待できるため、今後さらに容易に鑑別が可能となる新たな染色方法などを検討する必要性があると感じた。

症例3では、認定穿刺液細胞検査技師を取得している中川氏より、穿刺液中に腺癌細胞が認められた症例について、メイ・ギムザ染色した画像を交えて報告があった。計算盤上での細胞は、核構造やクロマチン増量などを観察するには限界があるため、必要に応じて、メイ・ギムザ染色を実施し、血液学的に細胞を観察することが重要である。本来、一般検査室では、細胞数のカウントを行い、病理検査室では、細胞の良悪の鑑別をするのが業務であるとの固定概念があったが、中川氏の施設では、一般検査室でそのすべてを行い、病理検査のスクリーニング的な役割を担っているとのことであった。穿刺液中には、白血球の他に、大食細胞や中皮細胞など、さまざまな細胞が出現するため、鑑別には困難を有するが、核構造やクロマチン増量の他に、細胞コントラストなども鑑別ポイントの一つになると画像を用いての説明があった。穿刺液の症例発表は、今回が初めてであったが、中川氏の説明は、自信に満ち溢れ、非常に分かりやすかった。一般検査分野における認定制度には他にもさまざまな制度がある。自らのスキルアップを目指し、そのスキルを業務に活かすことが診断且つ治療に繋がることを再認識できた。

今回の3症例を始め、日常業務におけるその多くは、一般検査室だけでは確定診断に至らないケースが多い。そのため、普段から細菌検査室や病理検査室との連携が保たれていることが重要であり、それらが、一般検査室の重要なアプローチに繋がるものと考えられた。

提出日 2023年 3月 17日

文責：室谷明子